

宗教多元主義

異文化／異宗教間の対話の基礎づけ
間瀬啓允

はじめに

「エスニック」という言葉を聞いたことがあるだろうか。「エスニック料理を楽しんだ」と言えば、たとえばタイ料理やインドネシア料理やポリネシア料理など、民族豊かな料理を楽しんだ、ということになる。西洋音楽とは異質な民族音楽であるエスニック音楽は、今では大学の音楽の講義で人気を得ている。

ところが、エスニック「紛争」となると、これは由々しい社会問題である。かつてオーストラリアは、白豪主

義にもとづいて人種差別をおこない、各地で紛争が起きた。中国人や日本人やインド人など、有色人種は低賃金で働かされ、しかもその低賃金労働さえも取り上げられてしまった。これが白豪主義の実態であった。しかし、約三十年前から、そのオーストラリアでは、どこでも国際理解のための教育が奨励され、とくに太平洋近隣諸国の国語と文化と宗教を学ぼうという運動が高まってきた。それ以後、オーストラリアは国際理解と親善のために力を入れている。

このオーストラリアと親戚関係にあるイギリスでは、

偽りの幻

兄弟愛や隣人愛を説いているはずのイギリスのキリスト教はどこに行ってしまったのであろうか。世俗化のすすんだイギリス社会では、最早キリスト教会は、国民にたいして何の指導力も影響力も持たないものになってしまったのであろうか。

いやいや、イギリスの教会は、依然として健在であった。このような人種差別の問題に逸早く対応して、「英国の人種差別主義——決断の時——」と題する重要な声明を発表したのである。

私たちは今や英国が諸々の人種・文化・宗教から成る多元主義的社会であることを率直に認める。私たちは異なる宗教に生きる人々、異なる生活様式に従う人々を尊重しなければならない。多元化した社会は私たちすべての者に新しい機会を与えてくれる。……私たちはナショナル・フロントの人種差別政策とその煽動、およびこれに類する他の一切の団体がキリストの

時に深刻なエスニック紛争が起きることがある。インド人やパキスタン人やアフリカ人の二世、三世が、イギリスに生まれ育って、定住している。ところが、低迷を続けるイギリス経済の最中、これらエスニック集団に、雇用や住宅や教育など、さまざまな問題が重く肩にのしかかってきている。しかも、イギリス社会の底流には、白いイギリス人による黒いイギリス人への人種差別がある。たとえば地下鉄の電車のなかで、「昔日の白いイギリスを再現しよう」という主旨のビラに驚かされることがある。これは右翼の政治団体による白豪主義ならぬ「白英主義」の煽動である。都市部でエスニック集団の労働争議が起きることがある。黒いイギリス人が平和的なデモ行進や座り込みの抗議行動に出ると、白いイギリス人の警官が騎馬隊を組んで、乱暴に襲いかかることもあるという。「クロ野郎」という言葉は、警官によって、今では常習的に使われているともいう。これが現代イギリスにおけるエスニック紛争の実態なのである。

福音の真理にまったく反し、また真の国益にも反すると信じる。

イギリスのキリスト教会は黒いイギリス人をはっきりと認め、現在のイギリスの社会が多くの人種を抱え込み、種々の文化や宗教から成る、文字どおりの「多元主義的社会」であることを率直に認めた。そして、人種や文化や宗教の多元化現象を直視して、生きる権利とともに、信じる自由の拡大をも保障しようと、教会は積極的な姿勢に転じたのである。保守反動の白いイギリス人たちの抱いた幻は、古いキリスト教帝国主義であった。しかし、キリスト教会は「その幻は偽りの幻であり、幻想ではない」と、断固これを拒否したのである。現代イギリスを代表する神学者、宗教哲学者のジョン・ヒックは、「現代英国におけるキリスト教と人種問題」と題する論文のなかで、次のように述べた。「近年のこうした展開と、とくに一九七七年十一月の声明『決断の時』とから、次のことだけは確実に言える——イギリスの教会指導者たち（ローマカトリックはその翌年四月に加わった）は調和あ

る多人種的英国の建設に同意し、種々の人種差別団体の煽動行為に断固反対する立場を公的に表明している。したがって、この声明は明らかに重要な出来事であった」〔神は多くの名前をもつ〕拙訳、岩波書店、所収。

キリスト教帝国主義時代の終わり

現代イギリスが、最早キリスト教中心の、いわゆるキリスト教帝国主義ではありえないという認識に立つと、次に重大な課題が出てくる。それは、キリスト教が他の偉大な世界宗教にたいしてどのような関わり方をすべきかという課題である。この課題を、いま「重大な」という言葉で形容したのは、これまでのキリスト教会が他の偉大な世界信仰にたいして適切な関わり方をしてこなかったという根本的な反省が込められているからである。この反省は、イギリスの教会の場合だけではない。今ではキリスト教文化の形成に寄与したヨーロッパ諸国の多くが、この反省の上に立っているのである。

一九八六年の晩秋にはジュネーブに、また一九八八年の早春にはミュンヘンに、そして一九九〇年五月にはミ

ネソタに招かれて、私は世界ルーテル連盟研究部門の主催する宗教セミナーに出席したが、そのいずれの折も、宗教の多元化現象とキリスト教をめぐる論議が中心であった。スカンジナビア半島の諸国から、ドイツ、オランダ、デンマーク、そしてアメリカなどの、いわゆるキリスト教国といわれる国々から、ルーテル派の教会に属する研究者たちが集まった。この人たちが一様に言うには、「移民や難民を受け入れてきて、もう国家は、キリスト教中心ではなくなってきた。多人種、多文化、多宗教から成る、いわゆる多元主義的国家になってきており、それだけに、これまでとは違ったキリスト教の異宗教にたいする適正な関わりが必要となってきた」というわけである。今までのように、キリスト教は異宗教に向けて、「この名による以外に救いはない。キリストの名による以外に救いは天下の何者にも与えられていない」というふうに宣言するわけにはいなくなってきた。それをすれば激しい宗教的排他主義になり、信じる自由を踏みにじることもなりかねないからである。

かの有名な現代ドイツのプロテスタント神学者、カー

ル・バルトは、法然や親鸞に代表される恩寵宗教としての浄土仏教を取り上げ、これを日本的なプロテスタントイズムと一応は認めながら、しかし、ただ一つ最も重要なものが欠けていると言った。それは何かというと、「イエス・キリストの名」である。キリスト教が他の宗教と違う決定的な点は、ただ「イエス・キリストの名」だけである。この名を抜きにしては、宗教はみな不信仰だ、というわけである。仏教に「イエス・キリスト」の名前が出てこないから、仏教は不信仰だ、仏教には救いがない、というのがバルトの言い分であった。これは典型的なキリスト教帝国主義の発想であり、宗教の激しい排他論である。しかし、この種の主義、主張は、今では明らかに後退している。

現代ヨーロッパの宗教事情

阪神大震災や地下鉄サリン事件で日本社会が騒然としているとき、私はイギリス第二の都市、バーミンガムの郊外にある閑静なセリオークカレッジにいた。悲しくもあり、また恐ろしくもある日本のニュースに同情を寄

せてくれるカレッジの友人たちには、「月に雲、花に風」の心境を語っていた。

そこは初めての場所ではなかった。以前、正確には二十年前、まだジョン・ヒック(前掲)がバーミンガム大学神学部の主任教授であったころ、そして、まだ「宗教多元主義」という言葉は彼の口にはのぼってこなかったころ、私はそのセリオークカレッジのうちの一つであるウッドブルックを寄宿に使って、そこからほど遠くないバーミンガム大学に足繁く通っていた。

そのころ、日曜日の朝ともなると、そのあたりの教会はどれも一斉に鐘を鳴らして、地域住民を圧倒していた。ところが、いまでは非キリスト教徒に遠慮してか、あるいは教会離れた地域住民の圧力に屈してか、鐘を鳴らす教会は一つもない。かつての教会が、いまはヒンズー教の寺院や、イスラム教の寺院に变身しているところもあった。宗教といえば、キリスト教が中心であったこのイギリス社会に、宗教の多元化現象がそこまで急速に進んでいたのである。その絶対主義をふりかざすだけのキリスト教の、文化一元主義的な帝国主義の時代はたしか

に終わっていたのである。いまキリスト教は、異宗教と共存する道を探っているのである。

六か月のバーミンガム滞在が終わるころ、私は講演の依頼を受けて、スウェーデンのルンド大学に赴いた。神学部の合同セミナーではイギリスでの経験を語り、キリスト教の帝国主義時代の終わりを熱く話した。ルーテル派のキリスト教しか知らない神学生たちは、すぐにはその趣旨がみこめないでいる様子だった。「キリストの名による以外に救いはない」という聖書の文句をくり返して、なおもキリスト教の絶対性をふりかざそうとする神学生たちには、「それではあなたにとっていま隣人とはだれのことですか。信仰を異にする人たちは、あなたにとっては隣人ではないのですか」とソフトに問いつつ、キリスト教にとって、いま異宗教との対話と共生が必至であることを強調した。

概して、ここではキリスト教の自己同一性を保持したままの、その絶対性を主張しようとする宗教的排他主義が根強いことに驚かされた。キリスト教への批判的問いは、とくにアメリカ社会ではフェミニズムや黒人神学と

結びついてラディカルに展開しているというのに、そこスウェーデンの第二の都市、ルンドでは、そうした動きにたいする気配は一向に感じられなかった。

ベルギーの第二の都市、ルーヴァンにも滞在した。そこはカトリックの伝統を堅持する大学町で、朝に夕に、教会は天にも届かんばかりの高い尖塔から、「ガラン、ガラン」と鐘を鳴り響かせ、その伝統的な權威を誇示していた。それでも知的な若者たちの教会離れには歯止めがかからないようで、教会の礼拝に彼らの姿を見かけることは少なかった。

「神」という言葉が死んでいる若者たちの心にふたたびその言葉を取り戻そうと、大学教授たち(多くはカトリック神父たち)は意図して哲学者の神を語り、これを信仰者の神に結びつけようと四苦八苦していた。

意識の小変革

異宗教にたいするカトリックの立場は、一九六〇年代初めの第二バチカン公会議以降、開かれたカトリシズムをモットーにして、宗教寛容の方向にすすんでいる。非

キリスト教的宗教のなかにも真理であり、尊いもののあることを率直に認め、非キリスト教徒もまたそれを知らずにイエス・キリストの恩寵にあずかっているという宗教的包括主義の立場を、カトリックは明らかにしている。

現代ドイツのカトリック神学者、カール・ラーナーは、「無名のキリスト教徒」という考えを明らかにして、「異宗教の熱心な信徒は真理の探究者として、みな無名のキリスト教徒であって、それゆえ、神に受け入れられ、神の救いの道にあるものと認めることができる」、と言った(『神学探究』第五卷六章、第十四卷十七章、第十六卷十三章)。これは、たしかに「イエス・キリストの名」を知らずにいる人々にも救いは生じつつあることを認めるという主張である。しかし、異宗教における救いを一応は認めながらも、それはどこまでもキリストによる救いの働きと見なす、とするだけの、いわゆる宗教の包括論であって、この限りでは、救いの意識の小変革でしかない。

インドのライムンド・パニカーは、ヒンズー教の父とスペイン人のカトリックの母との間で生まれ育ったカト

よ」。

ルビコン川を越える

この考えでいけば、熱心で誠実なカトリックは、根が
仏教であったのだと、仏教の側からは言えることになる。
「たとえ真理が何であるかは知らなくても、真理を求め
るその熱心で誠実な望みのゆえに、あなたは暗黙の仏教
徒だ、知られざる無名の仏教徒だ」と、仏教の立場から
は言えるわけで、これでは真の宗教理解にもならなけれ
ば、宗教対話にもならないだろう。

自分の宗教を中心に据えて、他の宗教はみな自分の宗
教の周縁にあるとする考えからは、他の宗教にたいする
適正な関わりは出てこない。このような考えにとらわれ
ている限りでは、現代における重要な課題である「諸宗
教の神学／教学」は構築することができない。現代イギ
リスを代表するプロテスタントの神学者、宗教哲学者で
あるジョン・ヒックは、こうした現状認識を深めたうえ
で、現代のキリスト教徒やキリスト教神学者たちに必要
なのは、いま宗教理解におけるコペルニクスの転回であ
るという。諸宗教の宇宙というのは、キリスト教中心で
も、これに代わるどの宗教を中心にしたものでもない。
それはただ「神」を、あるいは「神的存在」を中心にあ
わっているのだ。「神」が、あるいは「神的存在」が、
いわば太陽であって、すべての宗教はそれぞれのしかた
で、それを反射しているだけなのだ、という（「神は多く
の名前をもつ」前出、参照）。

ヒックはキリスト教の絶対主義を否定し、これまでの
キリスト教中心の、いわゆるキリスト教文化一元主義の
発想を完全に放棄している。その意味で、ヒックはルビ
コン川を越えたキリスト教神学者のうちの第一人者であ
る。彼は同じくルビコン川を越えたカトリックの神学者、
ポール・ニッターと共に、いわゆる「ルビコン会議」な
るものを開催し、そこにルビコン川を越えた、あるいは
越えつつある、世界の神学者たちを集めた（日本からは
八木誠一氏が招かれ、研究発表をした）。この会議の報告書
は同氏によって邦訳され、今では手軽に読むことができ
るが、それによると、これからの神学は多元主義的な諸
宗教の神学に向かうという。それは、多元主義的な宗教

理解にもとづいた神学／教学、あるいは究極的な神的存在
を中心にして展開される神学／教学という意味である
（「キリスト教の絶対性を超えて——宗教的多元主義の神学
——」春秋社、参照）。

神学上の大変革、コペルニクスの転回

三月月のルーヴァン滞在を終えて、私はふたたびバー
ミンガムのセリオークに戻った。そこに住むジョン・ヒ
ックとの交流を深めるためであった。かつての教会が、
いまはヒンズー教やイスラム教の寺院に変わっている場
所に案内してくれたのは、他ならぬこのヒックだったの
である。彼ほど宗教多元主義の考えを世界の思想界に広
めた人物はいない。

ヒックは二度にわたって来日し、東京と京都の主要な
大学で講演している。また幾冊かの著書も邦訳され、い
まこの日本でヒック研究も行なわれている。

一九六〇年代からイギリスでも宗教間の対話が始めら
れ、キリスト教の絶対性が問題にされた。とくにパーミ
ンガムのような大都市は白人、黒人、褐色人の混在する

多人種社会であり、キリスト教、イスラム教、シーク教、ヒンズー教、ユダヤ教、仏教の混在する多宗教社会である。そこでキリスト教にとって、異なる宗教との対話と共生が重要な課題となったわけである。

こうした状況下、キリスト教の神学者であるジョン・ヒックは、新たなキリスト教の自己理解の方法を問い始め、やがて「十年間の思索と実践のすえに」、神学上のコペルニクスの転回を遂げる。それはキリスト中心から異宗教のなかでも働く神中心、神的事実中心への転回である。かれは『神は多くの名前をもつ——新しい宗教多元論——』（前出）のなかで、次のように明言した。

神はキリスト教の教会や礼拝堂のなかだけでなく、ユダヤ教の会堂、イスラム教の寺院、シーク教の寺院、ヒンズー教の寺院のなかでも、異なりはしても重なる心象を介して礼拝されている。この事実を知ることが、その神がまさしく人類全体の神であって、私たち自身の親しい同族だけの神ではないと、新たな方向で知ることにはほかならない。

／完成に達することができるのである。

これは現代におけるすぐれた宗教理解のための一つの理論モデルではないのか。事実、私はこのモデルにしたがって、宗教的生の分析をおこない、その成果に十分満足している。それを次に記そう。

自我中心から神的事実中心へ

「私」はキリスト教徒であるが、関西方面に出張した折には岡山まで足を延ばし、金光教本部を訪れることがある。この信仰を生き抜いた母親のことが、そこでは一番よく偲ばれるからである。また、天理教の「おちば」も訪れることがある。熱心な天理教の友人たちと信仰の対話を交わすためである。そうした異宗教の場で、その都度、新たに発見するものがある。それは、人々はより高い実在に向けて共に心を開くよう参集しているという事実である。そして、「私」もそのうちの一人であるという事実である。そこも「神のみくに」であるという事実である。

ヒックは、宗教の多元性が存するという事実をキリスト教の立場から明確に認知し、キリスト教の思惟方法のなかに新たな変革を求めたのである。それが宗教多元主義であり、現代における宗教理解のためのパラダイム変換だったのである。その要点は、かれの別の著書『宗教多元主義——宗教理解のためのパラダイム変換——』（拙訳、法蔵館）のなかに、次のように明確に述べられている。

宗教多元主義とは、偉大な世界宗教はどれも（実在者）なり、（究極者）なりにたいするさまざまな覚知と概念、またそれに応じたさまざまな応答のしかたを具体化し、加えてその各々の伝統間において（自我中心から実在中心への人間存在の変革）が明確に生じつつあることを認める立場のことである。したがって、偉大な宗教的伝統はそれぞれ代替的な救いの（場）、あるいは救いの（道）と見なすことができる。そしてこの場なり、道なりに沿って、人は救い／解放／悟り

人々が自分以上の「より高い実在に向かう」のはどうしてかといえば、それは人間存在が根本的に欠陥のあるもの、不足をもつもの、破れをもつもの、つまりは自我中心の幻想にとらえられ、苦にさいなまれる生、だからである。けれども、人間存在の変革を通して、つまり「自我中心から神的事実中心への人間存在の変革」を通して、人間は神の国に参入したり、涅槃に到達したりすることができる。世界は本性上、慈愛に富み、恵みに満ちているからである。

たとえば禅宗では、生まれながらの自我中心性から解放されることを「私の放下」という。「我が（我ならぬもの）」によって初めて本当の我だ」というのである。キリスト教でも、「古い我に死んで新しい我に生きる」ということを言う。我は「我ならぬもの」によって本当の我になるというのである。日本人の作詞、作曲による賛美歌には、

主を仰ぎ見れば古きわれは
うつし世と共に速く去りゆき
我ならぬわれの現われきて

見ずや天地ぞ改まれる

と歌われている。要するに、自我中心から神的存在中心へと人間が変えられていく、そしてそこに救いの真意が込められている、というわけである。これはきわめて今日の宗教観ではないのか。本当の自己を知ることが救いに結びつくというのである。こうして「私」は、宗教的生の分析を通して、今日的な宗教理解へと導かれるのである。

このような人間の生の現実的変革は、事実として、どの偉大な世界信仰にも生じつつある。したがって、どの偉大な世界宗教にも救いは生じつつあると認めることができる。このことを諸宗教は率直に認め合おうではないか。これが宗教多元主義の強い主張なのである。ルビコン川を越えたジョン・ヒックは、次のように明言している。

宗教多元主義とは、自我中心から実在中心への人間存在の変革がすべての偉大な宗教的伝統において、さまざまに異なるしかたで生じつつあるものと認める

見解のことである。救いの道、解放の道がただ一つしかないというのではなく、その道が多数あることを認める見解のことなのだ。……だから諸々の宗教的伝統は、どれも人々がそこに救い／解放／完成を見出すことのできる救済的な「場」、あるいは「道」と見なされるべきなのである（『宗教多元主義』前出）。

理論上のいくつかの想定

宗教多元主義は、現代におけるすぐれた宗教理解のための一つの理論モデルである。理論モデルである以上、そこにはいくつかの理論上の想定がある。その一つは、現象の「多」に対する本体の「一」という想定、つまり神的存在は究極的には「一」なのだが、その本源の真相はそこに生起する現象的な「多」の背後に隠れてしまうという想定である。もう一つは、「多」であり「多様」である宗教的覚知は、「一」なる本体の現臨に結びつくという想定である。つまり、「多」なる宗教現象的世界は、私たちが思考したり体験したりする「一」なる本体の世界にはかならないという想定である。そこで、即自的に

存在する世界と、私たちに見えている現象的世界とは、区別はできても（カント）、分離はできない（ヒック）というわけである。

この想定にもとづいて、はじめて「多」であり「多様」である宗教的覚知の諸様態が統合的に説明されるものとなる。すなわち、さまざまに異なる宗教的覚知の諸様態は、究極的に同一の神的存在の現臨によって形成されるが、この現臨はさまざまに異なる宗教的伝統のなかで、さまざまに異なる宗教概念や宗教的意味構造を介して意識にのぼってくるものだ、ということである。実際に、宗教的経験を眺め、そこに認められる基本概念や具体的イメージを総括してみれば、根本的に二つの概念があった、これが宗教的経験の全領域を覆っているようである。その一つは神性の概念、あるいは神の概念、つまり人格的なものとしての実在者の概念である。そして、もう一つは絶対者の概念、つまり非人格的なものとしての実在者の概念である。しかし、そのいずれにもせよ、実際の宗教的経験の場においては、神性そのものとか、絶対者そのものとかに直接出会っているのではなく、つね

に何らかの特定の形態においてこれに触れているだけなのである。カント的な言い方をすれば、一般概念は構図化される。つまり文化のなかへと多様な現われ方をしたものととしての、いわゆる「充足した時間」、歴史によって、基本的なカテゴリーは具体化されるのである。これが、歴史の実体としての種々の宗教において、種々の異なるしかたによる神的存在の現臨が、種々の異なるしかたで経験されていく、という実情なのである。ヒックであれば、こういうであろう——ヒンズー教のモークシャ（悟り）であれ、仏教のサトリ（悟り）であれ、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の合一的神秘体験であれ、神的存在にたいする直接的で、無媒介的であるようにみえる意識は、それでもやはり人間主体の意識的経験にほかならず、それはどこまでも認知的な活動によっておこなわれる解釈の影響をまねがれてはいないのである、と。

確かに、私たちはみな、宗教者をも含んでみな、自分がその一部である文化の影響を受けているし、またその文化を自分のものとすることによって、自分の経験を育むことに役立てたり、またその文化のなかで確証されて

いる解釈を受け入れたりしている。この様子は、ヒンズー教、仏教、キリスト教、イスラム教など、どの宗教文化によって育まれてきた神秘家たちによっても明らかにされている。神秘家たちはけっして究極的に同一の神的存在にたいして、みな同一の合一体験を持つているのではなく、彼らもやはり自分たちの属する宗教的伝統のなかで、その概念的枠組や瞑想法にしたがいつつ、神的存在にたいしてさまざまに異なる覚知や応答をあらわしているのである。

神は多くの顔をもつ

宗教史が示しているように、キリスト教には創造主としての神そのものと、その受肉である「子なる神」との区別がある。仏教にも久遠の法身仏と、化身の応身仏との区別がある。ユダヤ教の神秘主義には無限の神的根源である「エーン・ソーフ」と、聖書の神との区別がある。イスラム教のスーフィズムには神的存在そのものである「アル・ハック」と、アッラーとの区別がある。キリスト教の神秘家、マイスター・エックハルトは、神性と神

とを区別したし、今世紀の偉大な哲学者、ポール・ティリッヒは「神の神」、つまり「有神論の神を超える神」という驚くべき考えを明らかにした。これらはみな同一ではないが、幾分か類似した区別を示しているように思われる。それは、どの宗教にも究極的な神的存在そのものと、人間が思考したり体験したりする神的存在とのあいだに区別がなされている、ということである。宗教領域における人間のこうした対応は、実際にはそれぞれの宗教的伝統によって形成され、またそれぞれの伝統の継承によって互いの文化の形成にも寄与していくのである。

宗教的経験は、このように広範にわたっているが、しかしこうした経験は二つの根本的な概念によって形成されているように思われる。さきにも述べたように、一つは、もっぱら有神論的な信仰にあらわれる神の概念、つまり実在を人格的にとらえる概念であり、もう一つは、もっぱら有神論的でない宗教にあらわれる絶対者の概念、つまり神的存在を人格的ではなく、非人格的なものとしてとらえる概念である。

相補性

しかし、それでも、一方は人格的なものとして、他方は非人格的なものとして、思考されたり体験されたりしているのはどうしてか、という疑問は残る。そこで、この疑問に答えるために、ここでは現代物理学における相補性の原理に助けを借りることにしよう。

これは波動と粒子の相補性である。もしも実験において、あるしかたで光という現象に働きかければ、光は波動の性質をもつもののように観察され、また別のしかたでこれに働きかければ、こんどは粒子の性質をもつもののように観察されるようである。観察される性質は、観察者がそれにいかに関わるかのしかたにかかっている。イーン・バーバーが、ニールス・ボーアの相補性の原理について書いているように、「観察の過程と観察される対象とのあいだには厳密な境界線は立てられない」のである（『科学時代の宗教』SCM社）。そして、バーバーはヘンリー・フォールズのボーア解釈を、次のような存在論を含意するものとして引用している。すなわち、その

前者の宗教伝統では、たとえばユダヤ教における「ヤハウェ」が、ユダヤ人にとって宗教的に認知されている神の顔である。イスラム教では「アッラー」が、それに絶対服従する人々にとって宗教的に認知されている神の顔である。「ヤハウェ」も「アッラー」も共に人格神である。もともと超越的な神的存在であるものが、「ヤハウェ」とか「アッラー」という名前によって、具体的に現実的存在として思考されたり体験されているのである。

他方、これと本質的に同じことが、東洋の宗教的伝統においてもいえそうである。たとえばブラフマン（梵天）、ニルヴァーナ（涅槃）、ダルマ（法）、シューンヤター（空性）、タオ（道）等々は、東洋の宗教的伝統における絶対者の概念である。そして、これらはいずれも非人格的なものとして受けとめられているが、そのうちのどれかが、実は何らかの具体的な形態、あるいは具体的な様式において思考されたり、体験されているのである。たとえば座禅を組んだり、ヨーガを実践したりするのはそのためである。

存在論は「古典的な枠組」のなかで主張されていたように、現象の対象のもつ諸性質に応じた限定的な性質を介してではなく、むしろ異なる現象のなかから現われ出てくる力を介して物質の対象の特徴をとらえている」。

このような事態は、宗教的な祈りとか、瞑想の形態とか、秘跡とか、共通の礼拝とかいった霊的実践の場合にあてはまるのではないだろうか。私たちはこのような実践を通して神的存在者との関わりをもつ。もし「我―汝」の祈りの行為において、実在者を人格的なものとしてとらえるならば、私たちはその実在者を人格的な神性として経験するのではないのか。その場合に気づいていなくてはならないことは、宗教史のなかに明示されている神格な人格——ユダヤ人を選民としたお方、イエスが教えた天の父、『コーラン』のなかでアラブ人たちに呼びかける神的存在——である。あるいは、もし私たちの宗教的文化がブラフマンの無限の、非人格的な「妙有——智慧——歓喜」^{ブハマ}として、あるいは諸仏の限りない慈悲において開示される永遠の「法身」^{ダルマカヤ}として、さまざまな瞑想形態において神的存在に接近できるのであれば、これも

また、私たちが神的存在者を経験するしかたとなりそうである。啓示なり、悟りなりは、すぐれて関係的なものであり、これはその宗教的受容性が異なった伝統によって形成されてきた人々との関わりの中から、異なった概念と異なった霊的実践とをともなうて、異なった形態をとるものである。したがって、究極的な神的存在が、一方では人格的に、他方では非人格的にとらえられるということとは、相補的な真理なのである。

利点

宗教多元主義の利点を、二つの側面から総括しておきたいと思う。一つは学問的な側面から、いま一つは宗教的な側面からである。

学問的には、利点は宗教の諸形態のなかに文化的要素を認めることによって、宗教間の差異をつぶさに観察することができるといふことである。このことによって、宗教的な意識内における人間的な投影の要素と、その系としての、偉大な宗教的伝統の内外における宗教的経験、実践の歪められた諸形態の可能性とを、現実的に認める

こともできるようになる。宗教はいつでも、またかならず善なるものであるとは限らないからである。また、宗教的な教義や教説が直截的な事実の断定ではなく、むしろ概念的体系として、「自我中心から実在中心への人間存在の変革」を生ぜしめるような一つの枠組を与えるものだ^{アウダ}と判断することができるようにもなる。「ヤハウェ」

「ブラフマン」「シヴァ」「三位一体の神」「空」「法」などとさまざまな異なる救いの脈絡内でおこなわれる記述は、究極的に同一の神的存在を指示しているのかもしれない。ちょうど明けの明星と宵の明星が、かつては異なる星であると想定されていたのに、今では同一の星であると了解されているように——。あるいは偉大な宗教的人物、たとえばマハトマ・ガンジーが、一方でインド独立のために完全な道德的要求を課した政治的指導者として見られ、他方で非暴力の愛を貫き通した一人の聖者として見られるように——。カンジーについての概念化はさまざまであったが、そのガンジーに応答することによって、本質的には同じしかたで自分の生の変革をうけた人々は大勢いたのである。イスラム教の偉大な聖者、ヤ

ラル・アッ・ディーン・ルーミーの言葉で言えば、「ランプは違えど、光は同じ」ではないのか。

宗教的には、利点は唯一絶対の宗教があるという想定から解放されることによって、神的存在者にたいする他の応答にも、それなりに真価を認めることができるようになる、ということである。今や、他の宗教的伝統に生きる人々に出会っても、その人たちの信仰が自分たちのものより劣っているというような、ア priori な判断にとらわれないでもすむようになる。こうすることによって、「真実」を求め合おうとする純正な対話、つまりそれぞれが他者の経験や洞察から学び合おうとする対話が実現可能となるであろう。宗教多元主義——多元主義的な宗教理解——のもとで、はじめて偉大な宗教的伝統間の関係は、宗教的に優劣をきそう関係とは違って、一つの現実的な基盤の上に打ちたてられるものとなるであろう。たとえばキリスト教の場合、第一バチカン公会議と、世界キリスト教協議会の「生きた信仰とイデオロギーを持つ人々との対話に関するプログラム」の成果により、宗教間の対話の姿勢は、かなりの程度まで、暗黙のうち

に多元主義的になってきており、事実上、他の世界宗教を有効な救いの脈絡内にあるものとして扱うようになつてきている。そこで、さらに個人レベルでも、また公式の異宗教間の対話のレベルでも、この明白な姿勢がさらに前進するよう期待されている。

おわりに——Q & A——

Q 宗教多元主義は、いわゆる宗教の相対主義であつて、それでは宗教のもつ固有性を骨抜きにしてしまうのではないだろうか。

A 答えは「否」である。相対主義は絶対的な「一」とか、超越的な実在者などというものを一切認めない立場であるのに対して、宗教多元主義は現象的な「多」に対する本体的な「一」を想定し、どこまでも多くの名前をもつて呼ばれる神的存在を明確に認める立場だからである。しかも現象的な「多」において、個々の宗教的伝統はその固有性を保持し保存することが許されている。

Q 宗教多元主義は、いわゆる万教帰一思想であつて、それでは帰するところ、もうひとつの世界宗教を目指す

ことになるのではないだろうか。

A 答えは明白に「否」である。宗教多元主義はどこまでも宗教の諸多性を認める立場であるから、それが目指す先は「いわゆる万教帰一」でもなければ、「もうひとつの世界宗教」でもない。宗教の諸多性は、現象的には「多」のままでありながらも、その向かう先は、たとえばすでにキリスト教の姿を大きく変容させた、あの「エキュメニカル」な運動にも似たものである。なぜなら、それぞれ異なる宗教的伝統が、互いに敵対しあう宗教共同体であるとは見えないような状態が、だれからも望まれているからである。

Q 宗教多元主義は古歌にいう、いわゆる「わけのぼるふもとの道は多けれど同じ高根の月をこそみれ」であつて、それでは宗教は何でもいい、何を信じてかまわない、ということにはならないだろうか。

A 「わけのぼる……」の古歌は、宗教理解のあるべき姿を一つのメタファーとして歌いあげているのかもしれない。しかし、だからといって宗教は何でもいい、何を信じてかまわない、「イワシの頭も信心からだ」とい

うことにはならないだろう。多民族（民族多元主義）、多文化（文化多元主義）、多言語（言語多元主義）という言葉と並んで、多宗教（宗教多元主義）という言葉がある。そのなかのどの言葉をとってみても、それは多元性のかでの主体的な、自己に責任を負うしかたでの生き方と結びついている。たとえば言語は何でもいい、文化はどれだつてかまわない、とは言つてみても、現にこの「私」は日本人であり、日本語の社会のなかで、日本文化に育てられて生きている。宗教においても、「何でもいい、何を信じてかまわない」というのではなくて、自ら主体的に、自己に責任を負うしかたで、それに関わっていくべきではないのか。その証拠に、たとえば仏教であれば、この「私」にとっては禅宗ではなくて真宗の、法然ではなくて親鸞の教えであつたり、キリスト教であれば、カトリックではなくてプロテスタントの、しかもフレンド派ではなくてルター派であつたりするわけである。宗教への関わりは、実は非常に意識的で具体的なものである。そして、その具体性から出発して、やがて観念的な抽象へと飛翔する。宗教多元主義も、実は具体的な宗教

現象からの抽象として展開しているものであつて、決して観念だけからの無謀な冒険をしているわけではないのである。

（ませ ひろまさ・慶応義塾大学教授）